

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER

7

2025 Spring
Tokushima Prefectural
Torii Ryuzo
Memorial Museum



今季の逸品

龍蔵ときみ子の 結婚記念品

—ヘルマンとドロテアの石膏像

男女が寄り添いながら階段を降りていく様を形にしたこの石膏像は、龍蔵ときみ子の結婚記念品で、龍蔵の書室（書斎）の床の間に置かれていたそうです。龍蔵は、この像について、ドイツの作家・詩人であるゲーテの作品『ヘルマンとドロテア（Hermann und Dorothea）』の主人公であるヘルマンとドロテアの石膏像であると述べています（『我が楽しき書室』『鳥居龍蔵全集』12）。

この像と酷似する石膏像の写真がアムステルダム国立美術館のウェブサイトで紹介されており、この像が『ヘルマンとドロテア』の一場面を表した作品である可能性は高いといえます。

現在では、表面は汚れて黒ずみ、一部を欠損してしまっていますが、二人にとって思い入れの強い作品だったことでしょう。

（植地岳彦）

資料で たどる、鳥居龍蔵の学問と生涯

第6章 鳥居龍蔵による 木頭調査の「古写真」とフィールドノート「那賀のあら妙」

1901（明治34）年8月、鳥居龍蔵は、故郷の徳島に帰省し、^{な かくん きとう} 県域の南部を蛇行しながら貫流する那賀川を溯り、その最上流に位置する那賀郡木頭地方を訪れ、人類学的・民族学的な調査を行っています。ただ鳥居はこの調査についての学術的な報告を行っておらず、調査に同行した同郷人で東京人類学会に所属する玉置繁雄が『東京人類学雑誌』17巻190号に記した「阿波国木頭山土俗」と、鳥居の自叙伝『ある老学徒の手記』（以下、『手記』）に「阿波の木頭」として掲載されたわずか20行、文字数にして500字程度の短文のみがその様相を知る縁となっていました。

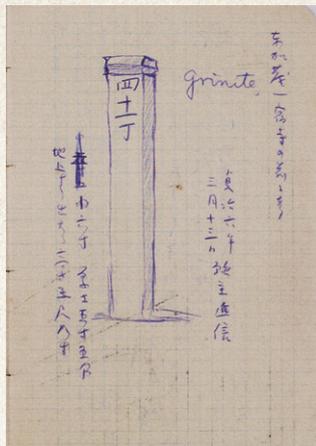


現那賀町木頭折宇宇井ノ内の住民を写した「古写真」

この調査に関しては、以前から東京大学総合研究博物館（以下「東大博」）が所蔵するガラス乾板に記録されている写真番号4005から4039までの一群の写真資料（以下、「古写真」）がその様相を捉えたものではないかといわれていました。しかし、写真各葉の来歴が詳らかではないことから、当時の山村の習俗に関する貴重な映像を含みながらも、資料としてほとんど公開されることなく、長い期間、東大博で保管されてきました。

このような折、当館での資料整理の過程で木頭調査の様相を記した鳥居直筆のフィールドノート「^{な かくん}那賀の^{たえ}あら妙」（以下「ノート」）が確認され、「古写真」と木頭調査との関連が証明されました。「ノート」は縦15.5cm、横10.5cmの大きさで、240ページ分の方眼紙を糸綴じしたものです。その内容は「^{（橋木）}とじき・^{（福島）}ふくしま^{（県）}二けん旅行 春の旅」（明治34年3月21日～3月28日調査）、「大島のたび」（明治34年10月21日～11月3日調査）など、複数の調査記録の合載で、上記の二つの調査の中間に当たる86ページから110ページにかけての25ページ分が、今回取り上げた木頭調査の記録である「那賀のあら妙」に該当しています。その内容は、明治34年8月14日～8月24日に至る11日間の日記形式の調査記録であり、当該調査の行程と調査対象が記されている他、随所に写真撮影に関する記述が見られ、この調査と先述の「古写真」との関係を示す根拠となり得るものでした。調査記録には当時の阿波の山村の習俗を示す記載が多くあり民俗資料として貴重ですが、その中に数点、鳥居の手になるスケッチがみられ興味を惹かれます。

ここではこれらのスケッチに焦点を当て、その内容と意味するところを確認してみましょう。

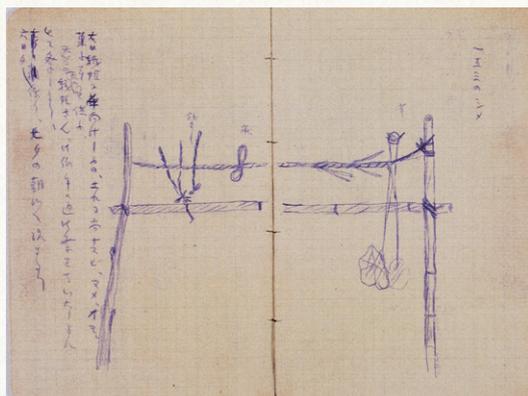


左「ノート」に描かれた丁石、右丁石の現況

一つ目は、8月18日の項に記された石柱のスケッチです。「ノート」には、「四十一丁」と刻まれた石柱が描かれていますが、この石柱は、1967（昭和42）年に「太龍寺の丁石」として徳島県史跡に指定された11基の丁石群のなかの1基で、地元で「かも道」と呼ばれる太龍寺参詣道の登り口に位置することから、当該丁石群を代表するものとして知られているものです。その形態は鳥居も計測し「ノート」に記しているとおおり、幅と

厚さがほぼ等しい尖頭方柱で頭部に二条線を施す五輪卒都婆形式のもので、近年太龍寺の地元では、遍路道の国史跡指定の動きのなかで太龍寺参詣道全域を対象に総合的調査がなされていますが、これらの丁石群は「阿波遍路道・かも道」の構成要素となっています。「ノート」のコメントには、石柱が中世の石造供養塔を丁石として転用したものであることの確認や、使用石材が徳島県内ではほとんど産出が認められない花崗岩製であることへの着目がみられ、近年の調査動向に対応する早期の指摘として重要です。管見ですが「ノート」は同丁石に関する学術面からの最も古い言及であり、明治後期の時点で、戦後の文化財調査に先駆けた観察がなされていたことが評価されると思います。

二点目は、8月20日の項に「一五三のシメ」とのタイトルで記された七夕飾りのスケッチです。その注記には、



「ノート」に描かれた七夕飾り

右は織姫に向けしもの、これに尚ナスビ、マメ、イモ、菓子などを供ふ
天の川織姫さん、御例年の通御祭りをいたします
とて祭るなり
六日夕作り、七日の朝川へ流すなり
ここには^(短冊カ)タンジャクをせず、かくの如くして七夕様をまつる（傍線筆者）

とあります。スケッチには木製の馬（台）を組み、その上にシメ縄を張り、作物や各種の糸、さし銭などを掛け供える様子が記されており、鳥居は短冊飾りを主とする当世風のものとは異なる古態を残す習俗として注目し、スケッチしたのでしょう。このように、「那賀のあら妙」は、東大博所蔵の「古写真」と木頭調査を結びつける資料であるとともに、山間の習俗を多様な視点から検討することが可能な一級資料であるといえます。（石井伸夫）

新出の手紙資料からわかる 鳥居きみ子の人物像について

鳥居龍蔵（1870-1953）の妻きみ子（1881-1959）は、20代の中頃に龍蔵と生まれたばかりの赤ちゃんを連れ、モンゴルでの調査旅行を行い貴重な記録を残しました。残念ながら、きみ子の名前は一般にほとんど知られていませんが、昨年、児童文学作家の竹内紘子氏により『鳥居きみ子 家族とフィールドワークを進めた人類学者』（くもん出版、2024年）が出版され、龍蔵の研究パートナーとしてのきみ子の存在が注目されるようになりました。また、当館でも企画展「モンゴルのフィールドワーカー 鳥居きみ子」（会期：2024年11月2日～12月8日）を開催しました。

企画展開催にともなう資料整理によって、きみ子が40代中頃、フランス留学中の子どもたちに宛てた新出の手紙約80通を確認しました。ここでは、手紙からわかるきみ子の人物像について紹介したいと思います。

1923（大正12）年春、17歳になった長男・龍雄は人類学の本場フランスに留学し、翌年には娘の幸子もフランスへ向かいます。子どもたちから来る留學生活の様子を記した手紙は、龍蔵・きみ子ら家族に大変うれしい知らせでした。きみ子は、子どもたちからの便りの内容を、新聞社からの求めに応じて編集し連載記事としました。二人の活躍が、世間からの注目を浴びることに喜びを感じていた一方、人々からの嫉妬やねたまにはくれぐれも注意するよう二人にアドバイスしています。

また、この頃、夫の龍蔵は長年勤めた東京帝国大学を退職し、「家族とともに」人類学を行う「町の学者」へと転機を迎えていました。この頃の手紙からは、きみ子がファミリービジネスである鳥居家の研究活動について、新聞などメディアを通じて積極的に発信したり、資金を援助してくれる実業家と交流したりして、家族イメージの向上に取り組んでいる様子がわかります。このことから、きみ子は鳥居家の活動をアピールする「プロデューサー」としての役割を果たしていたといえるでしょう。

（小林篤正）



1922年の鳥居一家 中央がきみ子



フランス留学中の子どもたちに宛てたきみ子の手紙

鳥居龍蔵の台湾関係資料を調査する

—2024年度、徳島での共同学術調査—

当館は、2022年9月に国立台湾史前文化博物館（以下「史前館」と記す）と連携協定を締結し、相互交流と共同学術調査を実施しています。その協定に基づいて、2024年12月5日から12日にかけて、陳俊男氏をはじめとする史前館の研究者をお迎えし、鳥居龍蔵ゆかりの台湾関係資料を調査しました。ここでは、7日から11日までの期間に、当館および徳島県内で実施した共同学術調査の様子を紹介したいと思います。

12月7日、台湾フィールドノートやメモ書き、手書きの地図、さらには人体計測表などの資料（いわゆる「紙もの資料」）を当館職員とともに調査しました。鳥居龍蔵が記したフィールドノートやメモ書きは癖の強いくずし字で記されており（当館では「鳥居文字」と呼んでいる）、文字が解読できたとしてもその内容について深く理解することは困難です。内容や資料の意義について理解するには、史前館の研究者の知識が必要不可欠です。その点にこそ、両館共同で学術調査を行う理由（意義）があります。8日も終日にわたり共同調査を行うことで、当館が所蔵する主な台湾関係資料の調査を終えることができました（図1）。



図1 当館での資料調査の様子（12月8日）

翌9日と10日は徳島県内のフィールドワークを行いました。まず、9日に鳴門市の旧館（徳島県立鳥居記念博物館、現在は「トリーデなると」と呼ばれ、市民ギャラリーとして親しまれている）を訪れ、鳥居龍蔵・きみ子夫妻の墓に手を合わせました（図2）。午後は鳴門市内に点在する鳥居ゆかりの史跡をめぐるしました。10日には、徳島市内から片道3時間かけて那賀町木頭地区を訪れ、太布調査を行いました（図3）。徳島での調査の最終日となった11日は、午前中に台湾フィールドノートの合同講読会を行い、午後は徳島市内の史跡（鳥居龍蔵誕生の地や寺町付近）をめぐるしました。

あわただしい5日間でしたが、鳥居龍蔵ゆかりの台湾関係資料の調査が進展するとともに、当館と史前館との関係はより一層強くなりました。引き続き、共同学術調査を発展させ、相互交流を深めていきたいと思ひます。（松永友和）



図2 鳥居夫妻の墓の前で手を合わせた後の集合写真（12月9日）



図3 太布の原料である楮を調査している様子（12月10日）

鳥居龍蔵・きみ子夫妻の墓

—「トリーデなると」を訪ねよう— (旧鳥居記念博物館)



図1 「トリーデなると」の外観



図2 「トリーデなると」の最上階にある
展望スペースから淡路島方面を望む



図3 鳥居夫妻の墓

1965(昭和40)年3月、鳴門市撫養町の妙見山頂(妙見山公園)に開館した徳島県立鳥居記念博物館(旧館)は、45年の歴史を刻んだ後、老朽化等のため、2010年3月31日をもって廃止されました。代わって、翌日付けで文化の森に徳島県立鳥居龍蔵記念博物館(現館)が設置され、同年11月3日、開館しました。2025年には、それから15周年の節目を迎えます。

旧館は天守閣を模した建築に特徴がありましたが、現在も外観は変わらぬまま建っています(当地には、戦国時代から江戸時代初期まで岡崎城がありましたが、無関係です)。旧館の廃止の後、改修工事が施されて県から鳴門市に引き渡され、防災拠点及び鳴門市のシンボルである「トリーデなると」として活用されています(図1)。展望スペースからの、往時と変わらぬ展望は抜群です(図2)。

ところで、「トリーデなると」の敷地内には、旧館とともにあった鳥居龍蔵・きみ子夫妻の墓が、今もあります(図3)。ドルメン(支石墓)をイメージした特徴的な形状です。鳥居は、1895(明治28)年、初の海外調査のため、中国の遼東半島へ行き、ドルメンを発見して中国東北部における石器時代の存在を明らかにしたことで、一躍名声を得ました。したがって、ドルメンは鳥居の学問人生のエポックとなったものであり、また、中国東北部・内モンゴルは、鳥居一家を挙げての調査の舞台でしたから、ドルメン型の墓に夫妻が眠るのは、大変意義深いものです。

当館には、「鳥居夫妻の墓は、現在どうなっているのか?」という問い合わせがしばしばあります。実は「トリーデなると」の開館日(年末年始以外の土・日曜日と祝日の午前9時~午後4時)には公開されているのです!ぜひ訪ねて、夫妻の事績に思いを馳せていただければと思います。(長谷川賢二)

鳥居龍蔵の 中国西南部調査と苗族先住説

鳥居龍蔵は1902（明治35）年7月から1903年3月にかけて、中国西南部の湖南省、貴州省、雲南省、四川省をめぐり、それらの地域で暮らす苗族や彝族といった少数民族の言語や風俗などを調査しました。

鳥居は晩年に著した自叙伝『ある老学徒の手記』において、中国西南部を調査する中で、現地調査だけでなく、文献を調査することの重要性を認識するに至ったと回想しています。彼にとっての中国西南部調査は、自らの研究手法に変化をもたらした出来事として位置付けられていたといえるでしょう。

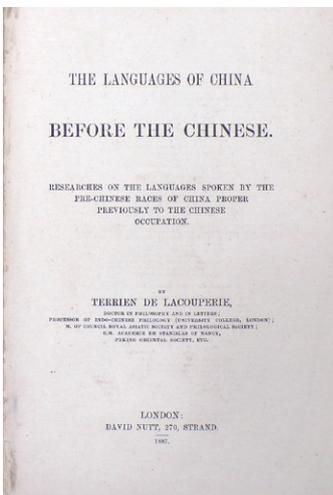


図1 ラクーペリー著『漢族以前の中国の言語』

ところで鳥居が中国西南部調査を計画したのは、それに先立つ台湾調査の最中に、とある学説に接したためでした。その学説とは、台湾北部に住む一部の先住民族と、中国南部の少数民族の間には、言語的に関連性があるというものです（図1）。

この学説を唱えたラクーペリー（Terrien de Lacouperie）は、19世紀後半のイギリスで活動した東洋学者です。彼の研究は、次のような歴史観に基づくものでした。すなわち、太古の中国大陸には漢族とは異なる諸民族が住んでいたが、後に漢族が西方からやって来て中国内地を占拠した結果、先住民族は南方に逐われた。そして苗族をはじめとする中国南部の少数民族——鳥居が調査をした頃は、そうした諸民族が「苗族」と総称されていました——は、漢族によって南に逐われた先住民族の末裔に当たるといえるのです（漢族西来/苗族先住説）。従ってラクーペリーは、一部の台湾先住民の起源が、中国南部の少数民族にあると考えていたこととなります。鳥居はこうした学説を自ら検証するために、中国西南部へ向かったのです。

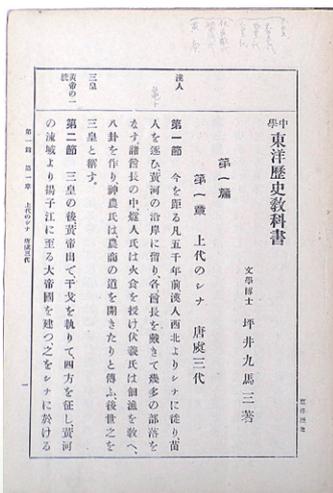


図2 坪井九馬三著『中学東洋歴史教科書』漢族西来/苗族先住説に基づく記述が見える。

漢族西来/苗族先住説は、当時の最先端の学説として明治期日本の学术界に受容され、学校の教科書などを通して日本社会に紹介されました（図2）。そして鳥居自身も、中国西南部調査の報告書である『苗族調査報告』などで、漢族西来/苗族先住説に基づく記述を残しています。同説は、今日の立場から見ると、荒唐無稽な過去の学説でしかありません。しかしそうした学説が一人の研究者の行動を左右したことは、興味深く思います。

（坂東 泰）

〈参考文献〉

- 吉開将人「苗族史の近代：漢族西來說と多民族史観」『北海道大学文学研究科紀要』第124号、2008年2月、25-55頁。
同上「鳥居龍蔵と銅鼓研究：鳥居を「民族史学者」へと導いたもの」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』第1号、2013年3月、149-169頁。

鳥居龍蔵記念博物館の 展 示 ・ 普 及 行 事 について

当館が2024年度の下半期に実施した主な行事と、2025年度の予定をお知らせします。

*
* 企画展「モンゴルのフィールドワーカー
鳥居きみ子」
(2024年11月2日[土]～12月8日[日])

鳥居龍蔵の妻で、自身も20代の中頃に夫と赤ちゃんを連れてモンゴルを旅し、貴重な記録を残した鳥居きみ子の生涯について、はじめて焦点を当てた展示を行いました。



企画展会場の様子

鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム
(2025年2月15日[土])

徳島県内の中学生と高校生が、歴史・文化に関する自主研究を発表し、優れた作品を表彰しました。



鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム
(2025年2月16日[日])

全国の高校生から歴史・文化に関する自主研究を募集し、一次審査で優秀賞を受賞した5組と徳島フォーラムの優秀賞受賞者が研究発表を行い、最優秀作品を表彰しました。



全国高校生歴史文化フォーラムの様子



- 鳥居龍蔵セミナー (2025年5月18日、6月29日、7月20日、9月21日、10月19日[日])
- 夏休みスペシャル みんなで発見!! 鳥居龍蔵を知ろう!! (8月3日[日])
- 企画展「中国西南部の旅人たち - 高原の少数民族と鳥居龍蔵 -」
(2026年1月31日[土]～3月8日[日])
- 企画展記念講演会①(2026年2月1日[日])
- 企画展記念講演会②(2026年2月22日[日])
- 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム(2026年2月14日[土])
- 鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム(2026年2月15日[日])
- 鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう(2026年3月22日[日])

※詳しくは当館ホームページをご確認ください。



鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER No.7

発行年月日 2025年3月31日

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山(文化の森総合公園内)

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp>